

## 出版界この一年

森重良太\*

私は、毎年、このレポートの冒頭部は「出版界の概況」としている。しかし今年は、「もっとも衝撃的だった出来事」の報告からはじめたい。

### 【1】取次、書店の破産と、その余波

#### [1.1] 太洋社、芳林堂書店の破産

2016年2月末、芳林堂書店が、自己破産した。負債総額は約20億円。

私は、週に1~2回は同書店・高田馬場店を覗いていた。2月に入ってから、雑誌の棚が品薄になっていたが、実は、入荷がストップしていたのだった。すぐに店頭で「問屋変更にもなうトラブルの為、入荷が止まっており…」といった主旨の貼紙が出た。主要帳合（仕入れ先）である出版取次の中堅「太洋社」が経営悪化に追い込まれ、自主廃業を模索していた、その影響で入荷が止まっていたのである。結局、芳林堂書店は急速に経営が悪化、自己破産に至る（その後、太洋社も3月に破産する）。

この構図は、太洋社の破産が芳林堂書店の破産を招いたように見えたが、実際は、逆ともいえた。芳林堂書店は、昨今の経営悪化で、太洋社への支払いが滞っていた。本は、最終的に書店の店頭で現金化されるから、書店が売上げを還流しなければ、お金の流れはストップする。芳林堂書店からお金が入ってこなくなった太洋社は、たちまち経営悪化に拍車がかかり、商品を出庫できなくなった（そのほか、大手取次が、太洋社帳合の書店を次々と「引き抜き」した点も指摘されている）。

出版取次は、単なる問屋ではなく、金融機能も備えており、書店と一心同体である。だから、A取次ルートが使用不可だからといって、すぐにB取次に移ることは容易ではない。芳林堂書店も、帳合変更を模索したが、どこも引き受けてくれなかったようだ。

「新文化」2016年2月25日付によれば、太洋社帳合の書店は約300社（800店舗）あったが、最終的に10社前後が、廃業・倒産に追い込まれた。

芳林堂書店の事業は「書泉」に移譲されたが、本稿責了時点（2017年2月初旬）では、旧屋号のまま運営されている。「書泉」は「アニメイト」の子会社のせいか、その後、サブカル系の品揃えが増えているように見受けられる。

#### [1.2] 信山社=岩波ブックセンターの破産

ところで、その芳林堂書店は、かつて、池袋西口に「芳林堂書店池袋本店」を構えており、池袋を代表する大型書店であった（2003年12月閉店）。ここで、1970年代に店長をつとめていたのが、

---

\*もりしげ りょうた 日本大学法学部新聞学科 非常勤講師

柴田信氏である。まだパソコンのない時代に、書籍の「単品管理」システムを開拓した名物店長だ。

その柴田氏は、1978年、岩波書店の子会社だった(株)信山社に入社し、岩波ブックセンターの経営に携わった。2001年、岩波書店が信山社を手放すと、(有)信山社を設立し、自ら代表取締役社長(後に会長)となって、岩波ブックセンターの事業を継承した。さらに神保町ブックフェスティバルを催すなど、公私ともに、神保町の顔として知られていた。<sup>(1)</sup>

その信山社=岩波ブックセンターも、11月末、破産した。負債総額は約1億3000万円。実は柴田信氏は、10月12日に86歳で逝去されていた。お別れの会が11月21日に開催され、その4日後の破産である。柴田氏の個人的な信用でぎりぎりまで経営が保たれていた様子がかがえる。

柴田氏が育てた2つの老舗書店、「芳林堂書店」「岩波ブックセンター」が立て続けに破産したことは、2016年の出版界を象徴する出来事であった。

### [1.3] 出版市場の「身の丈」とは

なぜ、こういうことになるのか。

「本が売れないから」で片づけるのは簡単だが、当然ながら社会構造の変化がある。「出版ニュース」2016年1月上中旬号の、藤脇邦夫氏(元・出版社営業マン)の寄稿「ダウンサイジング化していく出版業界」の論旨をご紹介したい。

2015年は「団塊の世代の最後、昭和24~25年生まれが、定年延長の最終年度の65歳で、完全定年となった」「以後、この世代は、すべての業種からほとんど姿を消す。そのまま年金生活に入る、入れるのはこの年代までである」。

この世代は「700~800万人で、基本的に活字世代の最後でもあるが、いくら少なく見積もっても、この一割以上の100万人前後は今まで何らかの読書習慣があり、この層は65歳定年以後も本を読む習慣はおそらくそのまま続くだろう」。

ところが「年金生活に入ると、本の購入代を捻出することができない」ので、「図書館でしか本を読まない層」が増える。結果、「毎年、100万人前後の本の実売消費」が消えていく。「かつての活字世代は完全に、『本は借りて読むもの』という意識に切り替わる。図書館でしか本を読まない習慣がさらに加速して、定着していく意識変化はもはや時間の問題だ」。

このことを証明したのが、前段で述べた、老舗書店の破産ではないだろうか(このほか、2016年8月には、紀伊國屋書店新宿南店が、6階洋書売場を残して閉店している)。

この“藤脇説”は、ほかの点でも示唆に富んでいるのだが、特に共感を覚えるのが、いまや出版業界の「市場規模は、1~1.5兆円が身の丈にあった売り上げなのかもしれない」との指摘である。

では、現在は、どれほど「身の丈にあっていない」のか、そして「図書館でしか本を読まない層」の増加をどう考えればいいのか、以下、簡単に考察する。

## 【2】2016年の出版概況

本稿は、2016年11~12月にかけて執筆しており、この時点で2016年のデータ類は、まだまとまっていない。よって、概況は「2015年」「2016年上半期」の2節に分けて綴る。

## [2.1] 2015年の出版概況<sup>(2)</sup>

2015年の全出版物（書籍＋雑誌）の推定販売金額は、1兆5,220億円（前年比5.3%減）。特に週刊誌の落ち込みが大きく、前年比13.6%減（過去最大のマイナス）。

返品率は書籍37.2%（前年比0.4%減）、雑誌41.8%（前年比1.8%増）。

2015年は、『火花』（又吉直樹著／文藝春秋）の大ヒットがあったため、微減で収まったようだ。そのほか、賛否両論を呼んだ『絶歌』（元少年A／太田出版）や、約6,000円の定価で15万部を売り上げた『21世紀の資本』（トマ・ピケティ、山形浩生他訳／みすず書房）なども貢献したと思われる。

## [2.2] 2016年上半期の概況<sup>(3)</sup>

本稿執筆時点での最新データによれば、2016年上半期の全出版物（書籍＋雑誌）の推定販売金額は7,701億円（前年比2.7%減）。ただし、書籍だけを見ると4,064億円で、前年比1.6%増である（【4】参照）。と思われる。

これに対し、雑誌は3,637億円（前年比7.1%増）と、またも大幅な落ち込みである（半期単位で過去最大）。現に、実売10万部を超えている週刊誌は、「週刊文春」（43万5,995部）、「週刊現代」（32万2,857部）、「週刊新潮」（27万54部）、「週刊ポスト」（24万3,020部）の4誌だけである。<sup>(4)</sup>

## [2.3] 「電子出版」市場<sup>(5)</sup>

ところが雑誌は、「電子出版」では伸びている。2016年上半期の「電子雑誌」の売上げは92億円で、前年比「76.9%増」である。その大半を占めているのが「dマガジン」で、約70億円と推定されている。これはNTTドコモが運営する電子雑誌サービスで、毎月400円（税別）で160誌以上（本稿執筆時）の雑誌が読み放題となる。この登録会員数が2016年3月で309万契約に達しているという。「SPA!」のように、紙（5万6,836部）を、電子読み放題の読者数（12万2,647）が上回っている雑誌もある。

2016年8月、アマゾンが「キンドル・アンリミテッド」なるサービスを始めた。月額980円（税込）で和書12万冊以上、洋書120万冊以上が読み放題というものだ（最初の30日間無料）。

だが、9月下旬、アマゾンは、講談社のコンテンツ約1,000点をはじめ、小学館、光文社、朝日新聞出版など、約20社のコンテンツを同サービスから無断で削除していたことが判明した。

アマゾンは、コンテンツを充実させるために、一種の“上乘せ契約”を行っていた。ダウンロードしたコンテンツの1割以上が読まれた場合、1冊全巻を読んだのと同じ金額を出版社に支払うというものだ。アマゾン側の正式説明がないので推測だが、あまりに契約が殺到し、想定以上の“上乘せ”を支払わなければならなくなり、予算オーバーとなった模様である（なお、アマゾンは、8月に、独占禁止法違反の疑いで、公正取引委員会の立ち入り検査を受けたことも報じられている）。

こういった現象を見るにつけ、今後、「雑誌」が生き残る道は、電子出版にあるようにも見える。ちなみに電子出版全体の市場は、2015年で1,502億円（前年比31.3%増）だが、その8割近くはコミックである。

### 【3】“充実”する公共図書館

現在、年間に全国の公共図書館（3,361館）で貸出される本は、個人貸出しが「6億9,048万冊」、団体貸出し（学校や読み聞かせグループなどへの貸出し）が「2,355万3,000冊」。合わせて約「7億冊」以上である。<sup>(6)</sup>これに対し、書店で売れる本は、年間「6億2,633万冊」。<sup>(7)</sup>つまり、いまや本は、書店で売れる数を、図書館で貸出される数が上回っているのである。

近年、本が売れない遠因の一つに、公共図書館の“充実”ぶりがあるのではないかと、との説がある。

2016年11月、日本書籍出版協会は、全国約2,600の公共図書館にあてて、文芸書の取り扱いについて「配慮」を求める要望書を送付した。具体的な内容は公開されていないのだが、読売新聞（11月23日付）の報道によれば、「利用者のリクエストが上位にある本の過度な購入や、寄贈を呼び掛けるところがあり、出版に携わる者に懸念が広がる」と指摘、「出版界からの声と住民の要望とのバランスに配慮され、文芸書・文庫本の購入や寄贈に、格段のご配慮」を要望しているという。

たとえば、2016年12月中旬時点で、世田谷区立図書館（16館、5図書室）の『コンビニ人間』（村田沙耶香／文藝春秋）所蔵数は「69冊」となっている。最多所蔵は奥沢図書館の「6冊」で、「うちみたいな小さな本屋に、ベストセラーは2～3冊しか配本されない」と嘆いている町の書店主にすれば、垂涎の数字であろう。

そして、「69冊」全冊貸出し中で、予約数は「1613件」。1冊に対し23人前後が予約待ちで並んでいる計算になる。仮に1冊が2週間貸出されるとして、最後尾の人は46週間、およそ1年近く待つことになる。

この状況に対し「買ったほうが早いのに」との意見は通用しない。おそらく予約待ちの多くのひとは、「図書館でしか本を読まない層」なのである。よって、仮に世田谷図書館から『コンビニ人間』を撤去しても、その分、書店での売り上げが増えるようなことは、ないはずだ。

問題は、この「図書館でしか本を読まない層」の増加である。本の対価が支払われないと、増刷ができない。そうなれば、文庫化や、生産媒体である文芸誌の継続も困難になり、本そのものが出せなくなる——これが、出版社や著者側の言い分だ。

もちろん図書館側は、反論している。

日本図書館協会副理事長の山本宏義氏は、図書館は「利用者に本と接する機会を設ける」「地域の文化拠点としての役割」「図書館内に街の書店の地図を置き、応援する」などと述べているが、<sup>(8)</sup>それでもやはり、図書館が「図書館でしか本を読まない層」を育成しているように見える点も、否めない。

山本氏は、同記事の中で、「現在の図書館が抱える最大の問題は、資料費の削減だ」と述べている。確かに資料費は、2000年の約346億円に対し、2015年では約281億円と減っている。ところが館数は、2,639館（2000年）→3,261館（2015年）と、大きく増えている。<sup>(9)</sup>こうなると当然、予算の奪い合いが起き、「実績」が重視される。「貸出し数」や「来館者数」である。貸出し数を増やすには人気のある本を多く収蔵することが早道だ。来館者数を増やすには、開館時間を延長し、館内に飲食店などを設置する。指定管理者制度の出番である。かくして民間の運営代行によって、公共図書館はますます“充実”する。

かといって、版元は、これ以上定価を下げることはできないし、ましてや本を無料にすることもできない。

これでは「図書館でしか本を読まない層」は増える一方であり、いよいよ、先述の“藤協説”にあった「1~1.5兆円が身の丈」が現実になりそうだ。2016年の推定販売金額が約1.5兆円だから、出版界の縮小傾向は、最終段階に入りつつあるのかもしれない。

#### 【4】2016年の売れ行き良好書、話題の本

一般には取次が発表するランキングが有名だが、実態に近いといわれている、オリコンの書籍ランキングを掲げる。<sup>(10)</sup>どれも「推定実売部数」なので、「発行（印刷）部数」は、この3~4割増しだと考えていただきたい。

- ① 『天才』石原慎太郎／幻冬舎 804,587 冊
- ② 『おやすみ、ロジャー 魔法のぐっすり絵本』  
カール＝ヨハン・エリオン、三橋美穂・監修／飛鳥新社 791,666 冊
- ③ 『嫌われる勇気 自己啓発の源流「アドラー」の教え』  
岸見一郎、古賀史健／ダイヤモンド社 535,370 冊
- ④ 『ハリー・ポッターと呪いの子 第一部・第二部 特別リハーサル版』  
J.K. ローリング他、松岡佑子・訳／静山社 492,104 冊
- ⑤ 『どんなに体がかたい人でもベターッと開脚できるようになるすごい方法』  
Eiko／サンマーク出版 489,373 冊
- ⑥ 『つくおき 週末まとめて作り置きレシピ』nozomi／光文社 466,234 冊
- ⑦ 『君の隣臓をたべたい』住野よる／双葉社 451,089 冊
- ⑧ 『羊と鋼の森』宮下奈都／文藝春秋 411,003 冊
- ⑨ 『世界一かんたん定番年賀状 2016』  
年賀状素材集編集部／KADOKAWA＝アスキー・メディアワークス 398,289 冊
- ⑩ 『コンビニ人間』村田沙耶香／文藝春秋 380,784 冊

2016年は、実売のミリオン・セラーは出なかった。

出版界では田中角栄ブームだったが、その中で突出していたのが①である。これは、田中角栄の一人称で描かれた、自伝とも小説ともつかない不思議な読み物であった。

③は2013年12月の初刊で、すでに人気を得ていたが、テレビで取り上げられたせいもあり、再ブームとなった。

また、小説投稿サイトから生まれた⑦、本屋大賞受賞の⑧、芥川賞受賞作で著者がコンビニでバイト中だった⑩など、小説が多くランクインした。ちなみに④は舞台劇の台本であり、小説ではない。その一方、⑤は健康実用本のように見えて、中身の大半は小説である。

文庫の第1位は、アニメ映画の監督自身による原作『小説 君の名は。』（新海誠／角川文庫）で1,196,994冊。2位の『夢幻花』（東野圭吾／PHP文芸文庫）の559,515冊のほぼ倍の売り上げを示した。

そのほか、元東大総長で仏文学者の蓮實重彦が著した小説『伯爵夫人』（新潮社）が三島賞を受

賞したが、著者が会見で「まったく喜んでおりません」「このような80歳の老人に賞を与えるのは日本文化にとって嘆かわしい」など、異様な反応を見せて話題となった。

盛岡のさわや書店フェザン店の店員、長江貴士氏が、ある文庫を、中身を伏せるカバーをかけて強力推薦し、「文庫X」として売り出したところ、全国の書店で展開される人気となった。12月に入って書名が、『殺人犯はそこにいる 隠蔽された北関東連続幼女誘拐殺人事件』（清水潔／新潮文庫）と明かされたが、ユニークな本の売り方として注目された。

## 注

- (1) 柴田信氏に関する記述は、主として『口笛を吹きながら本を売る 柴田信、最終授業』（石橋毅史／晶文社）を参考にした。
- (2) 「出版指標 2016年版」（公益社団法人全国出版協会 出版科学研究所）より。
- (3) 「出版月報」（公益社団法人全国出版協会 出版科学研究所）2016年7月号より。本稿責了直前に、出版科学研究所が発表したデータによれば、2016年の出版市場の売れ行きは1兆6618億円で、前年比0.6%減にとどまった（電子出版市場が伸びたため）。ただし内訳は、書籍7370億円、雑誌7339億円で、「41年ぶり“書高雑低”に」なった（「新文化」2017年2月2日付）。
- (4) 日本ABC協会（雑誌部数公査機構）による2016年上半期のデータ。産経新聞12月11日付「花田紀凱の週刊誌ウォッチング」より。
- (5) データ類は注3同より。本稿責了直前に、出版科学研究所が発表したデータによれば、2016年の電子出版市場の売れ行きは1909億円で、前年比27.1%増と、大幅な伸びを見せている。そのうち76.5%は「電子コミック」だが、「電子雑誌」のみに絞れば、52.8%増と、驚異的な伸び率である（「新文化」2017年2月2日付より）。
- (6) 日本図書館協会のウェブサイト内「公共図書館集計（2015年）」より。
- (7) 注2同より。
- (8) 読売新聞2016年12月15日付「図書館の文芸書購入のあり方」より。
- (9) 日本図書館協会のウェブサイト内「公共図書館経年変化」より。
- (10) オリコンのウェブサイト「発表!! 2016年 年間本ランキング」より。2015年11月23日～2016年11月20日の実質集計期間に、全国約3,719店舗をオリコンが調査した。

※出典元のないデータや事象は、複数の一般紙（朝日、毎日、読売、日経、産経等）、業界専門紙（新文化、読書人、図書新聞等）で広く報道されたものにつき、省略した。